

特集 筑後川流域治水



国土交通省九州地方整備局
筑後川河川事務所長

久留米市長

吉田大 × 原口新五 筑後川への思いを語る

未来志向で 川と新たな100年を

大正12（1923）年、筑後川の本格的な改修が始まり、今年で100周年。久留米市は、激しさを増す大雨に対し、国や県、地域の皆さんと河川流域全体で対策する「流域治水」を進めています。国土交通省九州地方整備局筑後川河川事務所の吉田大所長と原口新五市長に、筑後川への思いを聞きました。

心と暮らしに根付く筑後川

筑後川にはどのような印象が
吉田所長 筑後川は、人との関わりが強い川。農業用水をはじめ、生活に根付いていて、人々の心の中に常にある印象です。
原口市長 私の一日は、河川敷の散歩から始まります。すれ違う人には知り合いもいたりして。コロナ禍で、室内で人と人が接する場面

が減った一方で、河川敷を歩く人がかなり増えたように感じます。

流域で進めた治水対策

近年の浸水被害を経て、さまざまな対策で見えた成果とは
原口市長 国には、枝光上流排水機場の増設、筑後川や巨瀬川の改修工事など、ここ2〜3年でのかなりの治水事業を進めていただき、改めて御礼申し上げます。市でも、貯留施設の整備や田んぼダムの取り組みなどを進め、令和5年度末の貯留機能が令和3年度以前に比べ3・4倍になる予定です。災害がきっかけではありませんでしたが、市民もかなり筑後川への関心が高まったように思います。
吉田所長 久留米市は、全国的に治水対策に先駆的な自治体です。市長が毎月の記者会見などで対策



流域に恵みをもたらす筑後川（筑後川河川事務所提供）

の効果を発信してくださり、感謝しています。国・県・市、流域の皆さんの協力が積み重なった結果、昨年8月の降雨時には下弓削川の氾濫を防ぐことができました。金丸川でも、来年度から古賀坂排水機場の増設ポンプが稼働し、排水効果が高まると思います。
原口市長 それはありがたいです。市としても、引き続き流域治水の推進や事業効果の発信に取り組んでいきます。

川の365日

川の安心感が増す中、日常から川に親しむ仕掛けは
吉田所長 筑後川は水害の印象が強いです。河川敷が潰れるほどの

増水は年に10日間程度。多くの日は穏やかに流れています。百年公園に隣接する「くるめウス」や「くるめ船通し」を活用した河川利用の活性化にも取り組みたいです。

原口市長 河川敷に、これだけのスポーツ施設や駐車場があるのは財産です。本来は水や緑が豊かなので、筑後川のイメージを変えたい。くるめウス周辺から百年公園、中央公園まで一体的な利活用を進めたいと考えています。例えば、今年度からキッチンカーを始める事業者向けに補助をします。この事業が活用され、食も遊びも自然も楽しめる流れをつくりたいですね。
吉田所長 にぎわいづくりに食は欠かせませんね。ぜひ、くるめウ

ス前の河川敷にもキッチンカーに来てもらいたいです。

更なる連携を推進

最後に、共に川を守るパートナーとして一言
吉田所長 「流域治水」は全員野球であり、上流と下流、農業をはじめ他分野との連携が大切。河川利用の活性化についても、市の協力をお願いし、進めていきたいです。
原口市長 国には、治水事業を重点的に進めてもらっています。水害対策にも取り組みつつ、川に親しむ地域をつくりたいですね。
◎国県事業調整課（☎0942・309093、FAX0942・309712）



筑後川河川事務所長
吉田大（よしだひろし）

平成6年建設省（現：国土交通省）入省。内閣官房国土強靱化推進室、（独）水資源機構を経て、令和3年から現職。筑紫平野の美しさに日々感動



久留米市長
原口新五（はらぐちしんご）

平成元年、市議会議員に初当選。28年間の市議や議長を経て、令和4年から現職。毎朝、愛犬と河川敷の散歩をするのが日課

先人が築いてきた治水

私たちの生活を支える大河

熊本・大分・福岡・佐賀の4県にまたがる筑後川は、流域面積2860平方キロメートルで九州最大の1級河川です。熊本県阿蘇郡瀬の本高原を水源に、肥沃な筑紫平野を流れ、有明海に注ぎます。

筑後川は、古くからかんがい用水や生活用水などに利用され、農林水産業などの経済活動や文化活動など、私たちの生活に密接に結びついています。筑後川の流域内人口は約110万人と言われ、その水は久留米市内だけでなく、福岡都市圏や佐賀県東部など広い範囲に供給されています。

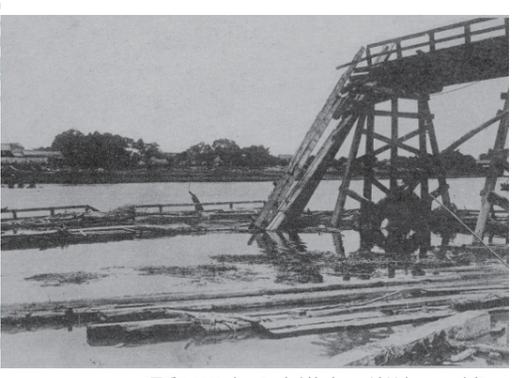
まちをのみ込んだ三大洪水

筑後川はこれまで頻繁に氾濫を繰り返し、利根川・吉野川と並び「日本の三大暴れ川」といわれ、筑

紫次郎の別名で呼ばれています。流域治水の歴史は長く、藩政時代から川を直線的にする工事などが行われていました。明治22年、大正10年、昭和28年には筑後川三大洪水が発生。中でも昭和28年の大洪水は、各所で堤防の決壊が起き、流域の被害者数は54万人といわれるほど甚大なものでした。

本格改修100周年を迎える

大正10年6月の大洪水を受け、大正12（1923）年、「筑後川



昭和28年の大洪水で崩壊して流される宮ノ陣橋



100周年記念で作成

筑後川本格改修100周年記念の「九州インフラカード」を筑後川河川事務所が作成し、配布しています。全11種類。筑後川の歴史や流域の施設を紹介しています。配布場所は種類によって異なります。詳しくはホームページで確認してください。



改修事務所」（現在の筑後川河川事務所）が開設されました。令和5年で開設100周年。これまでダムや引堤、水門の整備などさまざまな治水対策を行ってきました。近年、各地で想定をはるかに超える短期間での多量の降雨により、内水氾濫が起きるなど水害の変化も見られます。流域全体で協働しながら、ハード・ソフト一体となった対策が進められています。

流域治水推進プロジェクト

総力をあげて対策を進める

雨水貯留量は大幅に増加

市は、令和4年2月から「流域治水推進プロジェクト」を設置しています。これまでの治水対策に加えて、国・県などの関係機関と連携しながら、庁内では横断的な情報共有や事業の充実を進めています。

久留米大学と協働して同大学グラウンドを雨水貯留施設にする事業を進め、完成は令和5年秋ごろを予定。他にも公園や学校のグラウンドの貯留施設化も実施しています。

市民と協働した対策として、田んぼの貯水機能を利用した「田んぼダム」や各家庭などに雨水貯留タンクを設置してもらい取り組みを推進しています。また市民や企業と協働で、排水路のしゅんせつや土のう作りなどにも取り組んでいます。今後も市民の皆さんと共に治水対策を行っていきます。

流域治水推進プロジェクト ☎042・30・9714



【市民の皆さんによる土のう作り】三潴高校の生徒や地域の皆さんで土のうを作成。校区コミュニティセンターなどで配布しています。必要に応じて受け取れます。



【久留米大学貯留施設】久留米大学のグラウンドを掘り下げて、約21,800㎡の水をためることができるようになります。写真は半分が完成している様子です。



【田んぼダム】水田の排水口に水位調整ができるせき板を設置し、時間をかけてゆっくりと水路に水を流すようにします。



【雨水貯留タンクの設置】公共施設に雨水貯留タンクの設置を行います。各家庭や事業所の設置には、補助金交付制度もあります。



筑後川の恵みと共に歩む

流域全体で守る共有財産

筑後川防災施設「くるめウス」は、久留米市のシンボルでもある筑後川について知ってもらう入口です。水害などに対する防災や川の環境などをテーマに情報発信、啓発活動などを行っています。川や水、防災に関する市民活動団体の活動拠点でもあります。筑後川は私たちに多くの恵みを与えてくれる、流域全員の共有財産です。その財産を守るためには、環境の保全はもちろん、一人一人が上流域の人に感謝をして水を受け取り、下流域の人を思いやりながら水を流していく気持ちが大切です。ぜひくるめウス、そして流域各地に出かけて、筑後川に関心を持ってもらえとうれしいです。



くるめウス館長 川嶋睦己さん



くるめウス ホームページ